

# お茶の時間

村上 豊 (橄欖主要同人)

京都発信の雑誌に外に出てお茶しよう。という頁があり、小ぶりの急須や茶碗、それを納める籠の写真が載り、それを使って京都の市街一望の場所で「お茶飲み」をしている記事を読んだ。

むかしオバチャン同士で、今風に言えば女子会を「お香こううまく漬かったから」と、白い割烹着に小井をかくして持ち寄ったり「貰い物だけど」何やら茶受けをもって「お茶飲み」をした。

母も出かけたが専ら寄られる方で、お湯を沸し、茶受けを用意して待っていた。

仙台べんちゃら水からお湯。と言われた時代で、ご近所さんも長々と挨拶し、幾度もお辞儀をしていた。

いつも手ぶらでくるバアちゃんは話をご馳走なのか大きな声で

「(進駐軍が) どーんとピストル撃ったんだどや」とか「蒔がぬ種はほぎぬとは、

よぐ言ったもんだなあ」ほぎぬは生えぬらしいが、聞いたことのない方言で、耳でも遠いのか大きな声で言う言う人もいた。

「ご一服どうぞ」とか「一服あがらいん」

当時の年配の婦人たちの言葉はよかった。

母より上の世代は「ござりますてござりす」とさらに丁寧だった。(ございませでございます) 話題は何だったのか。オルゴールが止まりかけたような思い出。

今は? 芸能人のゴシップ、団地のいろいろな噂、知りたくもないが、根掘り葉掘り聞きだして教えたがる人も居る。

一物うらやみし、みのうへなげき、ひとのうへいひ、つゆちりのこともゆかしがり、きかまほしゅうして、いひしらせぬをば怨じ、そしり、また、わづか

に聞きえたることをば、我もとよりしりたることのやうに、こと人にもかたりしらぶるも一

と枕草紙一八段にあるとか、

清少納言は「いとにくし」ととめていると。

<sup>ま</sup>ち  
団地内は現在、男性は定年でその夫人たちがパートタイマーを二つ掛け持ち  
八面六臂の大活躍。それでもたまたま外と家での立話

「茶飲め」

「くっつい。腹」(満腹です。か?)

ものすごいニホン語を聞いてしまった。

その婦人たちの母親や姑は老人ホームや病院通いで「お茶飲み」は <sup>ハッ</sup> X か。

冒頭の京都発信の「お茶飲み」は  
「茶飲め」「くっつい。腹」の婦人たちは  
「そんなことご免」だろう。

……………くつろぎタイムの短歌を……………

湯を注ぐ番茶の葉より香ひたつ明治時代の父母のにほひして 吉野 鉦二

送り賜ひしさつまみどりとふ茶を入れて夜半励みをり人唄びつつ 今村 寛

をみならの妄語たのしき<sup>をんじき</sup>飲食のひまにて椿ちりつくすべし 馬場 あき子

チョコレートひと口噛めば恋の味ふた口妻の味とこそ知れ 岩田 正

あした先づ飲む珈琲はくさぐさの思想より濃く胃の腑に沈む 高野 公彦

飲食<sup>おんじき</sup>ののちに立つなる空壇のしばしば遠き泪のごとし 葛原 妙子

たましひのあかるくあれば象印魔法瓶<sup>い</sup>こそ容るるによけれ 小池 光

仙台弁の「お茶飲み」の話になるような短歌をひろった。  
飲食に馬場氏は「をんじき」葛原氏は「おんじき」と  
なぜだろうと話のたねができるのでは？